

# 聖なる学舎の異端児と始まりの街の問題児達

みゃーば

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なかよし部とこのすばのクロスがなかったので自分で作り直した  
(半ギレ)

なかよし部の時系列はなかよしX破壊後、このすばの時系列は、このファンの時系列が分からないのでこのファンを6巻終了後という鄭でこのファンの第1部終了後、という感じで書くこうと思っています。

目次

異端児、世界を渡る（前編）

1

## 異端児、世界を渡る（前編）

ある満月の夜、象牙の塔に3つの人影があった。

「ユニ先輩なんでこんな時間に呼び出したんですか。

ひきこもりすぎて時間分からなくなっただんですか。

普通の人はこの時間寝てるんですよ

覚えて下さいそして謝罪を要求します。」

「ちよーちよーチエル待ちなつて。

わかんなかったことはしやーないじゃん、な？

この子だつて地頭はいいんだからちやんと覚えてくれるつて。

んじやパイセン。

とりま謝罪よろ。」

「君たちやめたまえ。

ひきこもりという一単語で、

ぼくを抽象してバカにするのはやめたまえ。

これには深い訳があるんだよ。」

「どうせ昼間眠ったとかそんなことですよね。

こんな時間に呼ばれて来る私達も悪いですけどそこら辺の一般常

識と礼儀は身につけていてくださいよ。」

「違うんだチエル君。

これからぼくがしようとしていることは深夜にしか出来ないのだ

よ。それも満月のね。」

「なぜに満月。

ユニ先輩別に私ムードなんか整えられてもこの面子のためにとか

何も用意できてませんよ。」

「チエル、ちよいちよい。

あの人がそういうムードとかロマンとか理解してると思う？ 思わ

んっしょ。」

「あつそれもそうですね。

すいませんユニ先輩。てかそれならなんで呼んだんですか。

やっぱりバカだからなんですな。」

「勝手に自己完結してくれるな2人とも。」

「これから世紀の大実験を目撃することになるのだよ君たちは。」

「そんなもんでもいいから帰っていいっすか、

明日もバイトあるからはよ寝なきやならんよね、

じゃ、そゆことで。」

「世紀の大実験ってなんですか。」

私の睡眠削ってまですることなんですか一人でやっといってくださいよ。帰りますね。」

「そう簡単にこのぼくが帰すと思うかね、君たちが来た時点でこの建物の扉は全て施錠させてもらったよ。」

「は？何してくれちゃってんですか早く開けてくださいよ。」

「あーもーめんどいなあ、おばちゃん飴あげるから、ね？鍵開けて？」

「……いや、あの、実はだね……」

「……どしたんですかユニ先輩」「……なしたのパイセン」

「先程言っていた大実験のために魔法陣を描いたのだがね、

……原因不明の魔力反応が発生した。そして魔法陣が勝手に起動している。

端的に言くと、魔法陣制御不能。

………いやこれどうしょ、」

「はあ、んでその魔法陣ってのはどこにあるんすか、

来る途中には見なかったですけど。」

「……この塔の真下、というか塔の全体に効果が出るように描いた。」

「……は？いやいやいや、え？それじゃあ私達も巻き込まれるってことですか？何してくれちゃってるんですか！え、ちよ、ま、鍵開けて

！早く！」

「もうこれ逃げれんでしょ！魔法陣の効果って何、せめて吐けパイセン！」

「魔法陣に乗っている者達全員の知識にない場所への転移だ！

そしてこの僕がいる以上この世界に未知の場所等ない！

端的に言っと………

「異世界転移だ！」

その日、世界から3人の異端児がいなくなった。